

## 平成28年10月15日（土）の「仏教女性の集い」

吸い込まれそうな秋晴れの空の下、心穏やかなお念仏で今月も仏教女性の集いは始まりました。



今回は、近藤先生がノートなさっていた、哲学者 西谷啓治による数十年前の京都大学記念講演録「現代における人間の問題」の一部を取り上げお話をいただきました。

「なぜ人間は人間の肉を食ってはならないのか」というある青年の質問を例題に、人間という存在を、自然科学の見地と哲学的な見地からとらえ、なお、両者は一面の真理でありながら、反し合い、結局人間とはなにかが統一的に答えられないと言います。そして、仏教的な見地、一切の衆生が等しく仏性を持つという意味での絶対の平等という自覚が必要となることを教えられました。これは、人間だけでなく動物や草木までもすべての生き物を抱く眼差しでありましょう。

この問題に触れながら、私は自分が法学生だった頃、「なぜ人間は人間を殺してはならないのか」という議論を学生の間でしましたが、成功しなかった苦い記憶を思い出していました。まさに銘々が人間という存在を一面からしか見つめることができていなかったからです。社会常識と法律による抑止力、あるいはせいぜい道徳、それ以上の窮極の何かまで、思い至らなかった未熟さを今更ながら反省しました。さらに、近藤先生が「帝釈天の網」という仏教のたとえ話で、すべての人間の存在はお互いに関係し合っていることを明快にお教えくださいました。自分が独りよがりの気持ちになりそうなとき、また孤独な悲しみを感じるような時、このまばゆいような美しい光景を脳裏に想像しつつ自分の心を見つめようと決めました。

茶話会では、この日、私の母の命日であることから集う皆様が私の想いに耳を傾けてくださいました。「母の臨終の際、浄土へ旅立つ者に対して、行かないでという否定の言葉で見送ってしまったことを悔いている。」と申しました。

口にするのも辛いくらい、ずっと胸に苦しかったことでしたがお話をする間、尼僧様の先生方、会友の皆様の眼差しが私をいたわってくださっていました。近藤先生は「行かないでというのがあなたの本心だったでしょう。お母さんは母親です、もうなんとも思っていられない、今あなたを抱きしめてくれています。」と抱きかかえるしぐさで、力強くおっしゃいました。それでも、「遠いお浄土にいつか参って母にもう一度会いたい」と申している私に、さらに先生方は、お浄土は遠くない、今すでにお母さんはそばにいて抱きしめてくれている、仏様が一緒にいてくださるという意味でのこの世界はすでに浄土だとお諭しくださり「一体あなたはどこにいるというの？」とお訊ねになられま

した。こんなにやさしいお叱りは経験がありません。

母が他界して以来、毎日阿弥陀様に「お浄土にお連れください、母に会わせてください。」と祈っておりました。そして、なぜかお位牌を前にして母自身に語りかけることのできない、なにか遠くにいるのだからというあきらめのような気持ちがありました。そんな娘を母は案じて絶えずその肩を抱いてくれていたでしょうか。そうであるならば、母親よりもさらに大きな慈悲を持たれる阿弥陀様は、その母子ごと、大きな腕で抱いていてくださることでしょう。「ああ、仏様のいらっしゃるこの世界に私は生かさせていただいている」ということ、「お浄土へ参った母がなおいつもそばにいてくれるという毎日を過ごしていた」ということ、母と別れて丸3年のこの日、この二つの気づきを胸に新しい一日を踏み出しました。

お茶席のお菓子は「<sup>まがきのきく</sup>籬の菊」。秋のお花におもいがけないピンク色で気持ちが華やぎました。



(参加者感想 M.O)

**次回の「仏教女性の集い」は平成 28 年 11 月 19 日です。**

**皆様のご参加をお待ち致しております。**

「仏教女性の集い」は毎月第3土曜日、1時～4時  
参加費 1,000 円 宗教・宗派は問いません。  
条件は女性であることだけです。  
多数のご参加お待ちしております。  
市バス[知恩院前]下車、東へ 150m  
『吉水尼僧庵』(旧尼僧道場)で開催致しております。  
問い合わせは 隆彦院 075-561-7581 まで



「仏教女性の集い」の様子は浄土宗吉水会のホームページに掲載しております。